

日付の由来について

2021年2月

日本でウイスキーが飲まれ始めたのは1853年、ペリー来航時と言われております。

開国後は、スコットランド、アイルランドなどからウイスキーの輸入も始まり、それを追うようにして、国内ではイミテーションウイスキーの生産が始まります。これは、酒精アルコールに着色、味付けを行ったもので、おおよそウイスキーと呼べる代物ではありませんでした。その製造者の中から、寿屋、摂津酒造といった国産の本格ウイスキーの製造を目指す人々があらわれます。

中心人物は寿屋（現サントリー）の鳥井信次郎氏と、摂津酒造の竹鶴政孝氏であり、その物語は2014年9月に放送が始まったNHK連続テレビ小説「マッサン」でも語られております。摂津酒造がスコットランドに派遣したのが竹鶴氏であり、帰国後浪人となった氏を、技術責任者、初代工場長として迎え入れたのが寿屋です。

その後1923年に寿屋は山崎蒸溜所を設立し、1929年には初の本格国産ウイスキー「サントリーウヰスキー（通称“白札”）」を発売するに至ります。

この発売日が4月1日で、この日が記念日として最もふさわしいと考えます。

後に竹鶴氏は独立して、大日本果汁株式会社（現ニッカウヰスキー）を設立し、北海道の余市で蒸溜所の操業を開始します。なお竹鶴氏がスコットランドで作成した実習報告書、いわゆる“竹鶴ノート”は摂津酒造の上司である岩井喜一郎氏の手に渡ります。岩井氏は本坊酒造の顧問として、石和蒸留所の設立に携わりました。

1980年代には国内に地ウヰスキーのブームが起り、自社での蒸留を行う事業者も多くありました。しかし、1989年の酒税法改正を契機にこのブームは終焉を迎えます。

2010年代中頃からはクラフトウヰスキー蒸留所の設立が相次ぎ、現在では30を超える蒸留所が国内で稼働しています。特に、ベンチャーウヰスキー秩父蒸留所の活躍は、広く一般の方々にも知られていることと存じます。

現在、世界中で高い評価を受けているジャパニーズウヰスキーの礎を築いた先人の偉業をたたえ、また、現在の生産者を応援することを目的とし、ジャパニーズウヰスキーの日を記念日として制定いたします。

ジャパニーズウヰスキーの日実行委員会 事務局